

大腸がんは肉食、肥満、糖尿
病、運動不足などが原因とな
る「欧米型」のがんの代表
です。多くは、大腸粘膜の細
胞からポリープ（腺腫）と呼
ばれる良性の腫瘍が発生し、
その一部ががん化して増大し
たものです。

ただ、一部の大腸がんでは、
発がん刺激を受けた正常粘膜
から、腺腫を経由せずに直接
がんが発生する場合もまれに
あります。

とくに、腺腫が大きくなる
と発がんリスクが高くなりま
す。直径1センチ以上では3割弱
が、がん化するというデータ
もあります。

日本では、40歳以上に対し
て毎年2回の便潜血検査が住
民検診として行われていま

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

を早期発見するとともに、腺
腫を見つけ出して除去するこ
とが可能で、がんの発症も減
らします。受診者にとって受
け入れやすい10年に1度とい
う検査間隔であったこともあ
り、2016年には全米で50
歳と75歳で過去10年に内視鏡
検査を受けたのは60%以上
上っています。

この結果、もともと日本人

危険性高い大腸ポリープ

す。痛くもかゆくもないこ
んな簡単な検査で、進行大腸が
んの90%以上、早期大腸がん
の約50%、腺腫などのポリー
プの約30%を見つけることが
できるとされています。

しかし、アメリカは別の方
法で大腸がんを劇的に減らし
ています。大腸全体を内視鏡
でチェックする「全大腸内視
鏡検査」です。
内視鏡による検診は、がん

よりずっと高かった米国の大
腸がん死亡率は過去40年間で
半減し、男女とも日本人を下
回っています。米国の予防医
学の一つの勝利と言えるでし
ょう。

18年のわが国での大腸がん
による死亡数（予測値）は5
万3500人ですが、同年の
米国の予測値は5万6300人
です。人口が米国の4割以
下のわが国の方が大腸がんに
よる死亡総数が多いという信
じられない事態です。私も近
親者を48歳の若さで亡くした
苦い思い出があります。

前がん病変と言える大腸の
腺腫とちがって、胃のポリー
プの多くを占める「胃底腺ポ
リープ」は、ピロリ菌感染の
ない健康な胃にできるもの
で、胃がんにならないサイ
ンとさえ言えます。

同じポリープといっても、
胃と大腸では、危険性が大き
く違うのです。

（東京大学病院准教授）